第四講〈論説〉メディア論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

紙か電子かという問題もあるが、ツイッターの登場で「大量発話時代」が幕を開け、情報の流れに新たな変化が起きた。電子ブックにしても著者から版元、メディアを通して読者へという情報の流れは変わらないが、大量に発話され大河のような流れをなす夥しい言葉の断片を情報の「資源」ととらえるなら、これは従来の流れに逆行する新たな情報源の誕生を意味する。

一例として典型的な旅行ガイドブックを想像してほしい。編集側が入手した情報のみならず、旅行者の投稿を活用するこの種の旅行ガイドは、体験に根ざした情報だけに［A］があって、自主的に動いていく旅行には欠かせないものであった。分厚い書籍はかさばるので、旅のエリアに応じて本を分割して、必要なところだけ持っていくようなことがよく行われてきた。iPadなどのタッチパネルデバイスの登場は、この分厚い本を持ち歩くことから旅行者を解放してくれることだろう。これはこれで便利である。しかし、電子ブックはそこで終わらない。旅の情報が実際に旅をしてきた人たちの体験に近づくほどリアリティを持つなら、情報ソースは、過去に旅をした人から寄せられるデータよりも、むしろ「今、旅をしている人たち」からもたらされるものの方が信憑性が高い。だから電子ブックは「今」を取り込もうとするだろう。

たとえば、陸路でインドに入ろうとしている旅人に、インドとパキスタンの国境の町に今いる人のつぶやきは限りなく貴重である。治安状況は刻々と変化しているからである。あるホテルに六ヵ月前に宿泊した経験を持つ読者の投稿はそのホテルを評価する上で貴重な情報源だったが、そこに「今、泊まっている」人のつぶやきのリアリティには及ばない。今は雨期で、快適なはずのホテルにも雨漏りが発生しているかもしれないからである。

ツイッターのような不安定な情報でも、それをつまみ出して整理するしたたかな編集感覚を働かせるなら、そこにユニークな旅行ガイドが生まれる可能性がある。「旅行ガイド」はあらゆる書籍の比喩である。新たな情報の源泉や流れを把握した編集は、ユーザーの能動性と連携し、読者からさらに新たな情報資源が生み出されていく。この関係には今後も注目が必要だ。

（ア）都市もこれからますます「読み物」になっていくだろう。目指した映画館やショップにたどり着くだけではなく、都市と

いう未知なる出来事の塊の中から自分にとって好ましい情報をタイムリーに読み出してアクセスできるなら、都市はその深奥まで利用可能になる。

地図や買い物ガイドのような、あらかじめ編集された情報ではなく、情報端末から都市が読み出せるようになったらどうだろう。［B］、おなかがすいているときに、「三人」「カジュアル」「十九時」「イタリアン」などと、項目を選択するだけで、今いる都市エリアから、該当するレストランを精密に読み出すことができたら便利である。あるいは、花を買おうと思い立ったときに、「野草」「切り花」「茶事」などと、希望条件を選択するだけで、歩いていける距離にある花屋が複数件紹介されるような仕組みができてくると、都市の使い勝手はさらによくなる。映画にしても、セールの情報にしてもマッサージにしても同じことだ。

都市は膨大な情報で出来ている生命体のようなものだ。それを読み出す「編集」の創造性が増す、［C］血流が加速するなら、都市はいっそう細やかに成長していくだろう。表通りに面した一等地にのみ客が集まるのではなく、裏通りの小さな店の存在や魅力を読み出すことができたら、街はさらに奥深く分岐していく可能性を持つだろうから。

また、都市を今、歩いている人たちの多くは情報の発信者でもある。大量に発話された情報を目的に合わせて閲覧することもできる。メディアの充実と、タッチパネルデバイスの充実は、書籍の可能性のみならず、情報の流れや編集の可能性を確実に変えていくものであり、これによって個人が手にする情報の量や行動の可能性を飛躍的に拡大させていく。

［D］、人間の幸福が、メディアの進展に伴って飛躍するかどうかはわからない。情報や選択肢が爆発的に増えたからといって、それだけよりよい人生が送れるという保証はない。卵を五十万個差し上げますと言われても、あまりピンとこない。とても食べきれないし、そんな量を抱えること自体が落ち着かない。人が賞味できるのは常に一つの卵であって、それを何分ボイルし、どの程度の半熟かを吟味し、どんなエッグスタンドに立て、いかなるソルトシェイカーで塩をふりかけ、どのような銀のスプーンでそれをすくって食べるかが人生なのである。そこを踏まえつつ、飛躍的に増える情報の行方に目を凝らさなくてはならない。

電子ブックの登場で、テキストの管理・保存が楽になり、それを読みたい人にスムーズに提供できるようになると、紙の本のように手間のかかる方法で存在を許されるテキストは減少するだろう。電子ブックなら限りなくローコストで流通させられるのだから、平均的なコンテンツなら紙に刷る必要はない。情報文化の周辺に発生する新たなコモンセンスによって紙の本は減る。

しかしその速度は想像しているより早くないかもしれない。人類が、書物のようによく出来た、そして慣れ親しんだメディアを手放すには相応の時間がかかるのだ。

一方で、「本になる」というのは徐々に希少価値になっていく。言葉と紙の書物にとって(イ)この傾向はむしろ望ましい。ここしばらくの間、作れば売れるということもあってか、本にならなくてもいいような雑駁なテキストが、深く顧みられることもなく次々と紙に刷られてしまった。だから本の尊厳が下落して、そのほとんどは電子ブックに置き換えられうると錯覚されるほどの存在に成り果てていた。

おそらく出版社の数は減り、書店の数も減るだろう。しかし生き残った出版社は安易に本を制作することを慎むようになり、出版への覚悟と意志を明快に書籍に表現するようになるはずだ。書物として所有したいと意欲されるような魅力に満ちたテキスト。希有な業績であると誰もが認める内容。さらには、吟味されたタイポグラフィや装丁が醸し出す物体としての風格や尊厳。そういったものが、紙の書籍に再び求められるようになるだろう。だから「紙の本」は祝福された情報のかたちとして、新たな重みを獲得するはずである。著者も自著が電子ブックにとどまらず「紙の本」へと出世することを密かに期待するようになる。

書店も、ただ漫然と売れ筋から本を並べるような書店はネットストアに取って代わられるが、一方では個性的な品揃えや、創意に満ちた並べ方を工夫する「知のセレクトショップ」のような書店が注目されるはずだ。これからの店は、小さくても主張に理があれば必ず見つけ出され、それを求める顧客と結びついていくのである。

逆にこんなことがおこるかもしれない。個人個人の手元に安価に電子データが入手できるようになるなら、その持ち主の好みに添って本が書籍化されていく。自分だけの『カラマーゾフの兄弟』、私家版『陰翳礼讃』、ギフト用の『１Ｑ８４』、我が家オリジナル『広辞苑』など、少々値は張るが、版型や紙質、装丁などが比較的自由にカスタマイズができるようになる。

人々は今後ますます、多くのデータを抱えて暮らすようになる。写真、ブログ、メール、ツイッター……。加えて今後は電子データの小説、専門書、詩集……。データではなく本として持ちたいという欲求は決して小さくない。それらを書籍として物質化できるサービスがあるなら、それを実行に移す人たちが必ず現れてくる。

モニターの上に表示される像は、はかなく頼りない。自分で撮った旅の写真を写真集として手にすることができたらどんなに充足感があるか。丁寧に作りためた俳句を句集として親しい友人に手渡すことができたらどんなに感動的だろう。デザイナーた

ちは、その一つ一つに時間をかけてデザインすることはできないかもしれないが、装丁やレイアウトのアルゴリズムなら汎用用途に提供できるだろう。

テクノロジーは電子ブックを生み出す方向にのみ働いている訳ではない。一人一人の要望に応えて、一冊ずつから本が作れるようになる状況をも生み出していく。これまでは出版社が、本作りを代行していたわけであるが、その方式が一部崩れて、まずは最も安価に流通できる電子データとして多くの人々に配信され、しかるのちに、希望する人のみが、希望するかたちの本を具体化していく。そこでは再び「本」の出来映えが問い直されることだろう。

ともあれ、テキストと書籍の関係は、程よい緊張状態を再び取り戻すはずである。奇妙なものが多数生まれることで、本当に美しいものの意味もはっきりする。だから紙の本は、数は減らしても「情報の彫刻」としての輝きは失わないだろう。

百年先の未来はわからないが、僕らは今、この時代にしかできない仕事をしなくてはならない。電子化の波にさらされて緊張感を増す書籍。この状況を見誤って、(ウ)小さな未来を小賢しく先取りすることがないように、慎重に目をこらしつつ。

(原研哉「大量発話時代と本の幸せについて」池澤夏樹編集『本は、これから』岩波新書、岩波書店による。なお一部を改めた)

注　ツイッター＝インターネット上で一定字数の文章を書き込めるコミュニティ・サイト。また、そのサービスのこと。
タッチパネルデバイス＝画面をペンや指で押して操作する情報端末。
コモンセンス＝常識。
タイポグラフィ＝印刷術。文字の書体・大きさ・配列の仕方などのデザイン構成や表現。
カスタマイズ＝必要や好みに応じて変更すること。
アルゴリズム＝手順上の定型的な手法・技法。
汎用＝一つのものを広くいろいろな方面に用いること。

問1　[A]に入れるのに、最も適当と思われることばを、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。

問2　傍線（ア）の「都市もこれからますます『読み物』になっていくだろう」の説明として、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

1　人間は、都市についての膨大な情報源を渉猟する過程を通して、自らの行動範囲をしだいに都市のすみずみにまで拡げていくだろうということ。
2　都市は、人間が操作する情報端末によって裏通りの細部に至るまで調べ尽くされ、やがて万人に閲覧される対象と化していくだろうということ。
3　人間は、他人の手によって取りまとめられた情報源に飽き足らず、刻一刻と自らの目的に見合った情報を進んで創造していくだろうということ。
4　都市は、人間に端末を通じて内部の詳細な情報を提供することで、本来の未知の生命体としての姿を徐々に明らかにしていくだろうということ。
5　人間は、情報の集合体としての都市から必要な情報を引き出して、今後さらに自らの要求を満たそうとする傾向を強めていくだろうということ。

問3　[B]、[C]、[D]に入れるのに、最も適当と思われるものを、それぞれ次のなかから選びなさい。

1　あるいは　　2　だから　　3　しかしながら
4　なにも　　5　それなのに　　6　すなわち
7　たとえば　　8　さらに　　9　とするならば

問４　傍線（イ）に「この傾向はむしろ望ましい」とあるが、その理由として、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

１　電子のデータとしてではなく、紙の本として所有したい欲求を促すような魅力が引き出されてくるはずだから。
２　出版社や書店の一時的な数の減少はあるものの、将来的には業績が改善する方向へと進展していくはずだから。
３　ネットストアの躍進に伴って、電子ブックとしてコストを掛けずに流通させる利点が生まれてくるはずだから。
４　物体としての本やテキストの価値が再び発見され、結果的に電子ブックの風格や尊厳を高めていくはずだから。
５　電子ブックの普及によって、従来にはなかった選りすぐりの情報源としての意義が見出されてくるはずだから。

問５　傍線（ウ）の「小さな未来を小賢しく先取りすること」とはどのようなことか。最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

１　人間の真の幸福のあり方を追求することなしに、目先の利益ばかりに囚われて電子ブックを大量に制作すること。
２　電子化の風潮に乗じて、単にテキストの情報量やそれに伴う選択肢の数だけを爆発的に増加させて満足すること。
３　紙の書籍と電子ブックとの棲み分けを行わずに、品質の乏しいテキストを手当たり次第に印刷して製本すること。
４　情報化の現代において、大量に販売される電子ブックの中から必要な情報を収集し編集する能力を軽視すること。
５　モニター上の不定で移ろいやすい情報をそのまま紙の本にして、著者の積年の思いが達成できたと錯覚すること。

問６　本文の内容を表すのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選びなさい。

１　人間の幸福と本の尊厳　　２　大量発話時代と出版のこれから
３　電子ブックの可能性と限界　　４　書籍の電子化への懸念
５　ツイッターの登場と情報化社会

問7　『陰翳礼讃』の著者を、次のなかから選びなさい。

1　芥川龍之介　　2　永井荷風　　3　萩原朔太郎
4　川端康成　　5　谷崎潤一郎　　6　三島由紀夫

第四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　原　研哉＝はら　けんや（一九五八〜）岡山県生まれ。武蔵野美術大学卒。同大学院修了。同大教授。日本を代表するグラフィックデザイナーである一方、著書も多数。『デザインのデザイン』（サントリー学芸賞受賞）『白』などは東大・早大をはじめ現代文入試にも頻出

●『カラマーゾフの兄弟』→ロシアの文豪、ドストエフスキーの小説。他に『罪と罰』が有名

●『１Ｑ８４』→日本の小説家、村上春樹の小説。翻訳論やエッセイでも評価が高い。『職業としての小説家』はおよそ文筆に関わるすべての職業人にとっても参考になる

●『広辞苑』→岩波書店が編集出版している国語百科事典

●芥川龍之介＝あくたがわ　りゅうのすけ（一八九二〜一九二七）主要作品『羅生門』『戯作三昧』『河童』『歯車』新思潮派

●永井荷風＝ながい　かふう（一八七九〜一九五九）主要作品『あめりか物語』『ふらんす物語』『腕くらべ』耽美派

●萩原朔太郎＝はぎわら　さくたろう（一八八六〜一九四二）主要作品『月に吠える』『青猫』『氷島』口語自由詩

●川端康成＝かわばた　やすなり（一八九九〜一九七二）主要作品『伊豆の踊子』『雪国』一九六八年ノーベル文学賞受賞。授賞式講演「美しい日本の私―その序説」新感覚派

●谷崎潤一郎＝たにざき　じゅんいちろう（一八八六〜一九六五）主要作品『刺青』『痴人の愛』『細雪』耽美派

●三島由紀夫＝みしま　ゆきお（一九二五〜一九七〇）主要作品『仮面の告白』『潮騒』『金閣寺』

語句

夥しい＝おびただしい→非常に数が多い様子
信憑性＝しんぴょうせい→確かで信頼できること
能動＝のうどう→積極的に自ら動くこと。他者にはたらきかけること
深奥＝しんおう→奥深くてはかりしれないこと
コモンセンス→共通感覚。常識
雑駁＝ざっぱく→矛盾する知見が混在するなど統一されていないこと
顧みる＝かえりみる→良し悪しをじっくり考えること
希有・稀有＝けう→存在する量がきわめて少ない様子
装丁＝そうてい→ブックデザイン
醸し出す＝かもしだす→ある気分や雰囲気をそれとなく発すること
私家版＝しかばん→公的、組織レベルではなく、個人レベルでまとめたもの
汎用＝はんよう→広い用途で使用できること
cf. 凡庸＝ぼんよう→平凡。ありきたりでつまらないこと

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）空欄補充のテン型的問題を解く　①典　②展　③添　④天　⑤点

（イ）新聞に意見を投コウする　①校　②行　③稿　④綱　⑤降

（ウ）外国からの宿ハク客を接待する　①拍　②迫　③泊　④伯　⑤舶

（エ）外部の機関と連ケイする　①継　②系　③経　④形　⑤携

（オ）記事をヘン集して出版する　①編　②偏　③返　④変　⑤片

（カ）該トウする項目を多数挙げる　①頭　②当　③灯　④答　⑤党

（キ）コ客の依頼に誠実に応える　①顧　②故　③個　④雇　⑤庫

（ク）ショウ味期限を表示する　①商　②称　③消　④章　⑤賞

（ケ）大臣の業セキを比較する　①責　②績　③積　④席　⑤蹟

（コ）工作機械にハン用性を求める　①繁　②版　③汎　④帆　⑤販

第四講　模範解答

問1　リアリティ

問2　5

問3　B　7　C　6　D　3

問4　1

問5　2

問6　2

問7　5

復習問題　第四講　模範解答

(ア)①　(イ)③　(ウ)③　(エ)⑤　(オ)①
(カ)②　(キ)①　(ク)⑤　(ケ)②　(コ)③

解答漢字一覧

(ア)典型的　(イ)投稿　(ウ)宿泊　(エ)連携　(オ)編集
(カ)該当　(キ)顧客　(ク)賞味　(ケ)業績　(コ)汎用